

『息、溶けあつて風となり』／松永澄夫『風の想い——奈津——』書評

酒井一途

だれしも心の奥底に、大切にしまい込んだ甘美な記憶があるだろう。時を重ねゆく毎、ひそかに熟していくその記憶は、まるでワインが古樽の中で醸成されるように、人知れず豊かな味わいとなって脳裏によみがえる。

だれしもそうした記憶の前に、打ちひしがれたことがあるだろう。人恋しさに胸締めつけられるような真夜中、いくつもの記憶が頭を駆けめぐり、切々たる感情にひたされる、そんなひと時を過ごしたことが。

積もりつもった感情はいつか結晶となり、心のなかで輝きを放つ。長い年月を経て純化された、これがもつとも愛しむべき「想い」である。

風の想い、と題されたこの本。頁を開けば、丹念に編まれた「想い」にあふれている。二つの生命が心惹かれあい、躍動し、存在の不思議を感じ、溶けあうことを求め、時の止まることを望んだ、貴い瞬間が刻まれている。

そしてまた、流れる時の中で存在の不安を感じ、ただ二人寄り添うことしかできず、ひとたび触れては遠さがるよりほかない、生きることのせつなさが描かれている。

すべては過ぎゆく。もはや戻らない時の流れの中で、しかし、せつなさと悲嘆のうちに物語は終わりはしない。めぐりゆく季節と共に、ぼくは奈津の存在を感じる。

ああ、こんな幸福。月の明かりは静かで、夢が、ぼくの生を織ってゆく。織物の中に、貴女の姿が、至るところに浮かび上がる。

ギリシャ語で「風や空気、息」を意味する言葉を Pneuma という。これがギリシャ哲学においては「一切の存在の原理」を示す言葉となる。つまり風は、個人の身体をつらぬいて個人の存在を超え、世界全体へと遍在していく広がりをもつ。風に思いを託すことは、私個人を超えて世界に一体化しようとする試みなのだ。

二人の生はどこまでも二つのままだが、二人の息は一つに溶けあうことができる。息、溶けあつて風となり、風は生命をはこび、世界を包みこむ。時の流れからさえも、自由に解き放たれて。この地上を祝福し、「一切が溶け合う奇蹟」を表現させる。

長く東京大学で教鞭を執り、定年を迎えて今なお現役で立正大学の教壇に立つ松永澄夫氏は、哲学的な概念や言葉を使わず、日常の言葉で物事を語る哲学者だ。八年前に出版された『言葉の力』には、次のような文章がある。

悲しみであれ喜びと同じように、人の生を彩り、深くする。感情こそが、その時々、人に生きることの実質を与える。(中略)心かきむしる感情であつてさえ、それなしでどうして生きたと言えるのか。

こうした思索に裏付けられた物語は、まぎれもない生の讃歌となった。

風に焦がれ、風を夢見、風に身を任せたぼくと奈津。二人はやがてそれぞれの道を行くが、その恋はいつまでも心の奥底にあり、甘美な記憶として残りつづける。そしてまた、この地上に、生きて在ることの歓びをかみしめるのである。

(春風社・税込一五七五円)

酒井一途 (さかい いっと) 一九九二年、東京都生まれ。慶應義塾大学文学部在学中。